

SCHEDULE

東京都写真美術館展覧会スケジュール

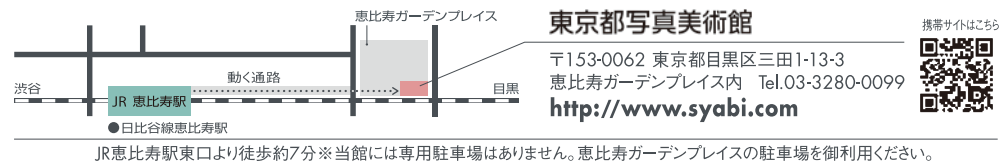
2012	3階展示室	2階展示室	地下1階展示室	1階ホール
9	自然の鉛筆 技法と表現 7月14日(土)～9月17日(月・祝)	田村彰英 夢の光 7月21日(土)～9月23日(日)	鋤田正義展 SOUND&VISION 8月11日(土)～9月30日(日)	 © Koichi Onishi 2011 「スケッチ・オブ・ミヤーク」 9月15日(土)～
10			第23回日本写真家協会会員展 第10回日本写真家協会公募展 10月6日(土)～10月21日(日)	
11	機械の眼 カメラとレンズ 9月22日(土・祝)～11月18日(日)	 操上和美 - 時のポートレート ノスタルジックな存在になりかけた時間。 9月29日(土)～12月2日(日)	写真新世紀 東京展 2012 10月27日(土)～11月18日(日)	 © 天のしずく製作委員会 『天のしずく 辰巳芳子 "いのちのスープ"』 11月3日(土・祝)～
12		日本の新進作家 vol.11 この世界とわたしのどこか 12月8日(土)～1月27日(日)	第13回上野彦馬賞 11月24日(土)～12月2日(日)	
2013				
1	北井一夫 いつか見た風景 11月24日(土)～1月27日(日)	映像をめぐる冒険vol.5 記録は可能か。 12月11日(火)～1月27日(日)		
2	第5回恵比寿映像祭 2月8日(金)～2月24日(日)			
3	 磐梯山・河口遠望 ウィリアム・キンモンド・バルトン 1888年 夜明けまえ 知られざる日本写真開拓史 北海道・東北編 3月5日(火)～5月6日(月・祝)	 © The Estate of Erwin Blumenfeld アーウィン・ブルーメンフェルド 3月5日(火)～5月6日(月・祝)	APA展 3月2日(土)～3月17日(日)	
4			知られざる鬼才、 マリオ・ジャコモリ /1925-2000 3月23日(土)～5月12日(日)	※スケジュール・展覧会タイトル等は予告なく変更される場合があります。最新の情報はホームページをご覧ください。

ご利用案内

- 休館日：毎週月曜日(月曜日が祝日の場合、その翌日)、年末年始(12月29日～2013年1月1日)
※ただし10月1日(都民の日)は開館、翌10月2日は休館
- 開館時間：10:00～18:00(木・金は20:00まで)、2013年1月2日・3日は11:00～18:00 入館は閉館の30分前まで

割引チケットの販売

お得な割引料金で2会場以上を自由に組み合わせてご覧いただける割引チケットを販売しております。詳しくはチケット売り場でおたずねください。



※本誌編集ページに掲載されている観覧料および商品の価格は、原則として消費税込みの価格です。
東京都写真美術館ニュース「アイズ12」75号 ●発行日：2012年9月21日 / 企画・編集：東京都写真美術館事業企画課 普及係
●印刷・製本：JT印刷株式会社 ●発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館 ©2012 ●本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製を禁じます。

eyes

| 2012 Vol.75 |

TOKYO METROPOLITAN MUSEUM OF PHOTOGRAPHY
NEWS MAGAZINE

この世界と わたしのどこか

日本の新進作家 vol.11

somewhere between me and this world-
Japanese contemporary photography

将来性のある作家を発掘し、新しい創造活動の展開の場として毎年開催している「日本の新進作家」展。第11回となった本展では5人の女性作家を取り上げます。様々な問題が山積する現代にあって、彼女たちはどのように今を捉え、自分たちの足下を見つめているのでしょうか。本展担当学芸員のエッセイから考察します。

「失われた20年」と言われる。わたしはこの言葉に違和感がある。「失われた20年」が経済的観点からの1990年代から2000年代への評価であるとは知っていても、なお違和感が拭えないのは、そこには1990年以前への懐古の念が漂っているからである。デフレによる消費や投資の停滞、雇用環境の悪化による非正規労働者の増加、所得格差の増大、膨大な財政赤字、少子高齢化、急激な円高・株安、輸出の減少、それに追い打ちをかけるような、東日本大震災と原発事故。確かにこの国には閉塞感と不安感が立ちこめている。それでも、この20年間で「失われた」とはわたしには思えない。



菊地智子〈長江の河際でのファー〉重慶、2008年

26歳の社会学者・古市憲寿は、非正規雇用による格差や高齢化による現役世代の負担増などの世代間格差によって「不幸」を報じられる若者を分析して、いや、「日本の若者は幸せ」なのだと言う。(内閣府の「国民生活に関する世論調査」によれば)日本の若者の7割が今の生活に満足しているのだ。この満足度は、他の世代よりも高い。30代でこの数値は65.2%、40代で58.3%、50代では55.3%まで下がる。古市は過去の若者論を分析した上で、仲間との小さな幸せを求め、「今、ここ」に満足しながら、同時に、変わらない毎日に閉塞感を感じ、社会や将来に対して不安を持つ若者像を称して「絶望の国の幸福な若者たち」と呼んでいる。

この20年間で「失われた」のは、既得権益を持つ大きな集団や制度、それに基づく価値観への信頼である。金融資本主義も官僚制度も家父長制度も、二大政党制も大企業中心主義も、グローバル化も市場中心主義も、ほんとうのところは誰のためのシステムなのかと疑うようになった。「失われた20年」とは、そうした信頼を失った権力や経済的な優位を甘受した者たちが、「昔は良かった」と嘆く自己憐憫の言葉である。社会状況の

変化によって、変わってしまった人々の意識に応じてシステムや制度を変更するのではなく、信頼を失った旧態依然のシステムや価値観を無理矢理稼働させていることが、閉塞感と不安感の原因である。そんな「絶望の国」の社会や政治にうんざりして見限って、若者は慎ましくも堅実に「今、ここ」に幸せを見いだそうとしているのだろう。

本展は、1972年から1979年生まれの人々の女性作家を取り上げている。いずれもバブル崩壊後に成人し、この10年余でアーティストとしてのキャリアを確実に積み上げてきた作家たちである。閉塞感と不安感に満ちて、様々な問題が山積し、既存の価値観が大きく変化している現代にあって、それでも彼女たちはそれぞれが自分の足下を見つめながら自分の課題と格闘し、独自の世界を創造している。今もっとも勢いのある新進作家5人の作品を考えることで、日本の「今」の一側面を浮かび上がらせてみたい。

※ 古市憲寿「絶望の国の幸福な若者たち」講談社、2011年、p.7より



大塚千野〈1976 and 2005, Kamakura, Japan〉2005年

大塚千野のタイムマシーン

「Imagine Finding Me」と題された作品は一見、誰でも自分のアルバムに貼ってある、ありがちな旅先のスナップショットに見える。色褪せた小さな判サイズの写真には、どれも少女と大人の女性が写っている。それが過去の大塚千野と現在の大塚千野のダブル・セルフポートレートだと気付いたとき、俄然、それぞれの写真から重層な意味が立ち上がってくるのである。彼女の過去への旅は、センチメンタルではなく、ノスタルジーの趣もない。作品の中で、少し不機嫌に佇む少女は独立した一人の個としてまっすぐ前を向いて一生懸命に世界と対峙している。家族とは、国とは、言葉とは、人との関係とは、わたしとは…、誰もが逃れられない問いを、彼女はごまかすことなく真摯に問い続けている。

大塚千野 / 10歳で単身英国のサマーヒルスクールに留学し、その体験を綴ったエッセイ「サマーヒル少女日記」で注目を浴びる。ヘルシンキ写真トリエンナーレ2009や「The Sum of Myself-Self portraits」展(ロサンゼルスカウンティ美術館LACMA)など欧米を拠点に多くの展覧会に招待されている。2012年、オランダのハウス・マルセイユ写真美術館で個展を開催した。

田口和奈の女性像

彼女はファッション雑誌を集め、そこに掲載された複数の写真をモチーフに、写真のようなリアリティで女性像をキャンバスに描く。その絵をもう一度写真に撮って、暗室作業で試行錯誤を繰り返して最終的なプリントに仕上げている。写真というメディアに備わっている現実性の前提が裏切られることにより、見る者は見ることでそのものを疑わざるを得なくなる。そしてそれは作者の意図どおり、メディアが発するイメージが溢れ、リアルとバーチャルが混在し、自分自身が消失していくような不安に襲われる、「私」と「あなた」が交換可能な現実世界の騙し絵となっている。

田口和奈 / 2008年東京芸術大学美術研究科博士後期課程修了。2010年五島記念文化賞新人賞を受賞し、ウィーン、ロンドンに滞在する。「横浜トリエンナーレ2011」他国際展に多く招待されている。

田口和奈〈ブルーの青み〉2012年、Courtesy of the ShugoArts

菊地智子の中国

「The way we are」と題されたシリーズは中国のトランスジェンダーやドラッグクイーンを写している。菊地智子はドキュメンタリー写真の正道を歩んでいる。何年もかけて主題にじっくりと取り組み、彼女達が置かれている状況を重層的に調査して客観的に描こうとしている点で伝統的なドキュメンタリーであり、また、被写体との距離感、自分の最も大切な者たちへと注ぐ眼差しである点で、プライベート・ドキュメンタリーに近い。驚くべき速さで激変する中国社会に翻弄されながら、自分のセクシュアリティと向き合い格闘する彼女達の姿は、そのまま菊地智子のものなのだろう。

菊地智子 / 1996年武蔵野美術大学空間演出デザイン学部卒業。翌年に香港に移住。1999年から北京に拠点を移し、「News Week」「New York Times」「Far east economic Review」「Paris Match」「V magazine」など、雑誌・新聞等を中心に活躍する。



菊地智子「バー「零点」の楽屋で踊るヤンヤン、河北省」2007年

蔵真墨「愛知県名古屋市」2008年 Courtesy of ZEIT-FOTO SALON



笹岡啓子「Ito man, Okinawa」2011

蔵真墨の伊勢参り

「お伊勢参り」には、来生の救済のための純粋な巡礼という大義名分にかこつけた、観光や他の目的も入り交じった本音が混じる。自分の写真に行き詰まった果ての気分転換としての「旅」と、それでもカメラを携帯せずにはいられない自分を自覚し、その自分が注ぐ視線を確かめるための「巡礼」。蔵真墨が「お伊勢参り」と名付けたのはそんな意味が込められているからである。蔵真墨の視線は確かに、優しいものではない。けれども本人が自認するほど、冷え冷えとした視線でもない。彼女はすれ違って、もう会うこともない人々や瞬間を愛おしんでいる。彼らの何気ない仕草や表情や、それが作り出す空気の中に、今を生きる強さと困難さと危うさを見ている。

蔵真墨 / 1988年同志社大学文学部英文学科卒業。2010年さがみはら写真新人奨励賞受賞。2001年以降、多くの個展を開催している。写真集に「蔵のお伊勢参り」(蒼穹舎、2011年)、「kura」(蒼穹舎、2010年)他。



笹岡啓子のフィッシング

「Fishing」と題された一連のシリーズでは、いずれも遠景で撮られた釣り人が立っている。びんと張った空気の中で、釣り人は何ら特別な存在ではなく、海と空と崖に溶け込んでいる。「竿を振り、糸を垂れる。全神経をわずかな糸の動きに集中させている。透明な糸に沿って光が走る。張り詰めた糸は見えない暗い海の中に照応している。束の間のことだとしても、釣り人の姿は過去からも未

来からも隔てられ、海とひと連なりになる」。自分に纏っているすべての記憶や歴史、日常のあれこれ、すべての煩わしさを削ぎ落とし、自分という自意識さえも消却する瞬間、自分と世界との間のどこかに存在する、理想の風景を笹岡啓子は描き出している。

笹岡啓子 / 2002年東京造形大学卒業。2008年に「VOCA展2008」奨励賞を、2010年に日本写真協会新人賞を受賞。写真集に「EQUIVALENT」(Rat Hole Gallery, 2010年)、「PARK CITY」(インスクリプト、2009年)他。

笠原美智子(東京都写真美術館学芸員) / 「日本の新進作家 vol.11 この世界とわたしのどこか」展図録より抜粋 ※カタログは当館ミュージアムショップで発売します

2F

2階展示室 Exhibition Gallery

友の会割引 | 三越カード割引 | アトレビューSuicaカード割引

12月8日(土) → 2013年1月27日(日)

1月2日・3日は年始特別開館

日本の新進作家 vol.11

この世界とわたしのどこか

somewhere between me and this world - Japanese contemporary photography

□ 一般 700(560)円 □ 学生 600(480)円 □ 中高生・65歳以上 500(400)円

()は20名以上の団体および東京都写真美術館友の会会員、当館の映画鑑賞券ご提示者、上記カード会員割引料金を
※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

□ 主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館 / 東京新聞 □ 協賛：株式会社ニコン / 株式会社ニコンイメージングジャパン / 富士フイルムイメージングシステムズ株式会社 / 凸版印刷株式会社 / 東京都写真美術館 支援会員 □ 協力：フォトグラファーズ・ラボラトリー / フォト・ギャラリー・インターナショナル / 株式会社カシマ

将来性ある作家の創造的精神の支援を目的に、毎年異なるテーマで開催している「日本の新進作家」展。その11回目となる本展『この世界とわたしのどこか』は、香港写真芸術協会からの要請により、日本に先駆けて10月に香港で開催した後、12月に東京都写真美術館で開催します。東日本大震災という未曾有の災害や経済の低迷などにより、社会情勢や生活環境の不安定化が続く中で、私たちの価値観は大きく変化しています。そんな不確かな日本で、現代作家たちはそれぞれが自らの課題と格闘し、独自の世界を創造しています。本展は、「個人」と「社会」の関わりを考えながら独自の表現を模索する、今もっとも勢いのある5人の新進女性作家たちをクローズアップ。それぞれの個性が際立つ作品群を通じて、複眼的に日本の「今」を浮かび上がらせていきます。

【香港展】主催：香港写真芸術協会 会期：2012年10月13日(土)～11月4日(日) 会場：香港アートセンター URL：<http://www.hkac.org.hk>

❖ 展覧会関連イベント

【作家とゲストによる連続対談】

12月8日(土) 大塚千野×笠原美智子(当館学芸員・展覧会担当者)
12月9日(日) 菊地智子×竹内万理子(写真批評家)
1月12日(土) 笹岡啓子×豊島重之(精神科医・モレキュラーシアター芸術監督)×高橋しげみ(青森県立美術館学芸員)
1月13日(日) 蔵真墨×丹野章(写真家)
1月20日(日) 田口和奈×岩永忠すけ(画家)
時間：15:30～17:00 定員：各回50名 会場：東京都写真美術館2階ラウンジ
※展覧会チケットの半券をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます。
※当日10時より1階受付にて整理券を配布します。

【新春特別フロア・レクチャー】

1月4日(金)14:00～ 田口和奈、笹岡啓子、蔵真墨
出品アーティストによる展示解説を行います。展覧会チケットの半券(当日有効)をお持ちの上、会場入口にお集まりください。

【10時間討論会「世界はこうなったが、写真はこうある。」】

パネリスト：飯沢耕太郎、楠本亜紀、倉石信乃、小原真史、沢山遼
清水穂、土屋誠一、豊島重之、林道郎
企画・司会：遠藤水城
日時：1月11日10:30～20:30 定員：70名 会場：東京都写真美術館1階アトリエ
※展覧会チケットの半券をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます。
※当日10時より1階受付にて整理券を配布します。

❖ 担当学芸員によるフロアレクチャー 第1・3金曜日 14:00～
※本展覧会の半券(当日有効)をお持ちの上、会場入口にお集まりください。

3F

3階展示室 Exhibition Gallery

友の会無料 三越カード割引 アトレビュー-Suicaカード割引

9月22日(土)祝 → 11月18日(日)

平成24年度 東京都写真美術館コレクション展

機械の眼 カメラとレンズ

The Eye of the Machine: Camera and Lens

 一般 500(400)円 学生 400(320)円 中高生・65歳以上 250(200)円

()は20名以上の団体、当館の映画鑑賞券ご提示者、上記カード会員割引料金

※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※東京都写真美術館友の会会員は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

 主催:東京都 東京都写真美術館
 協賛:凸版印刷株式会社 協力:平凡社


ビル・プラント イースト・サセックス海岸 1957年
ゼラチン・シルバー・プリント



植田正治 「白い風」より 1981年 発色現象方式印画

紀元前、古代ギリシャの哲学者アリストテレスがピンホール現象を発見して以来、この光学現象は世界中の科学者によって研究され、レンズを装着した視覚装置として発展していきます。やがて、ルネサンスを経て「カメラ・オブスクラ(暗い部屋)」という概念が確立すると、画家たちが完璧な一点透視図を描くための装置として利用。そして19世紀、映像を固定する感光技術の追究からダゲレオタイプ(銀板写真)が生まれ、持ち運び可能な「カメラ」が登場したことで、本格的な写真術の時代が始まるのです。21世紀の今、「写真」はデジタル映像技術の確立によって新たな時代を切り開いています。しかし、それがカメラ・オブスクラという視覚装置に支えられていることに変わりはありません。本展では、19世紀から現代までの写真作品を通じて、カメラやレンズなどの視覚装置の発達、それによって写真家たちが切り拓いてきた様々な視覚表現と、その新たな可能性を探索します。

≫ 主な出品作家

福原路草、エドワード・ウェストン、アンセル・アダムス、熊沢鷹二、木村伊兵衛、森山大道、植田正治、ゲリー・ウイングランド、鈴木理策、ビル・プラント、三木淳、W・ユージン・スミス、松江泰治、奈良原一高、山脇巖、山崎博、緑川洋一、佐藤時啓、ウィリアム・クライン、アンリ・カルティエ・ブレッソン、佐々木崑、中村征夫、宮崎学、アンドレ・ケルテス ほか

≫ 主な展覧構成

- シャープ・フォーカスとソフト・フォーカス
- パン・フォーカスとディフュゼンシャル・フォーカス
- レンズの視覚—広角レンズと望遠レンズ
- カメラ・アングルの解放—俯瞰撮影と仰角撮影
- 時間—長時間露光／ブレ／瞬間 人工光
- 未知の世界へ 特殊効果

※担当学芸員によるフロアレクチャー 第2・4金曜日 16:00～
 ※本展覧会の半券(当日有効)をお持ちの上、会場入口にお集まりください。

2F

2階展示室 Exhibition Gallery

友の会割引 三越カード割引 アトレビュー-Suicaカード割引

9月29日(土) → 12月2日(日)

平成24年度 東京都写真美術館自主企画展

操上和美 — 時のポートレート

ノスタルジックな存在になりかけた時間。

Kurigami Kazumi - portrait of a moment

 一般 700(560)円 学生 600(480)円 中高生・65歳以上 500(400)円

()は20名以上の団体および東京都写真美術館友の会会員、当館の映画鑑賞券ご提示者、上記カード会員割引料金

※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

 主催:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館/朝日新聞社
 協賛:LVMH ウォッチ・ジュエリー ジャパン株式会社 タグ・ホイヤー ディヴィジョン/TUGBOAT/株式会社ジョン ロブ ジャパン/株式会社 聖林公司/ライカカメラジャパン株式会社/株式会社ピラミッドフィルム/東京都写真美術館支援会員
 協力:株式会社サイバークラフィックス/株式会社写真弘社/フォト・ギャラリー・インターナショナル/富士フィルムイメージングシステムズ株式会社/有限会社イマジン・アートプランニング


シリーズ<NORTHERN>より



シリーズ<Diary>より

広告写真界の鬼才、操上和美(1936～)は、日産「フェアレディZ」、ソニー「ジャッカル」、サントリー「オールド」、ブリヂストン「レグノ」、NTTデータ通信「ホーキング博士」等のCMや、ロバート・フランク、笠智衆、キース・リチャーズ等のポートレート、映画作品「ゼラチンシルバーLOVE」(2009)等、常に新しい感覚を写真、映像に取り込んできました。本展は、操上が自らの作品として撮りためてきたスナップショットから、鮮烈な美意識に貫かれた作家の写真眼に迫ります。風化した記憶のようなモノクロ写真と強烈な色彩のカラー写真のコントラストが印象的なシリーズ「陽と骨」、自らの故郷へと旅をする「NORTHERN」等、ライフワークを中心に数万点の中から選ばれた作品を紹介するとともに、特設コーナーでは357点の作品をあえてコピーで制作したポートフォリオ『Diary』(2009)の全作品を展示します。

※ 展覧会関連イベント

【対談 椎名誠(作家)×操上和美】
 10月14日(日)14:00-15:30 1階ホール(定員190名)
 対象:本展チケットをお持ちの方
 受付:先着順、当日10:00より1階受付にて入場整理券を配布します
 開場:13:30(整理番号順入場/自由席)

【展覧会関連上映会】
 操上和美ドキュメンタリー映画「THE MOMENT 写真家の欲望」
 監督:宮本敬文 制作:ウイスキーススタジオ/アトムエックス/サイレントフィルム
 上映日:11月22日(木)～24日(土)、29日(木)～12月2日(日)
 上映時間:各回19:05～20:50 1階ホール(定員190名)
 料金:大人1,000円 学生700円
 受付:当日券は10:00より1階ホール受付で販売します(入場整理番号付き)
 整理番号順入場/自由席 ※未就学児の入場不可 ※当日券のみの販売となります

上映関連対談 宮本敬文×操上和美
 11月22日(木)18:00～19:00/12月2日(日)18:00～19:00
 ※当日の映画鑑賞券にてトークショーをご鑑賞いただけます
 お問い合わせ:info@themoment.jp.net

※担当学芸員によるフロアレクチャー 第2・4金曜日 14:00～
 ※本展覧会の半券(当日有効)をお持ちの上、会場入口にお集まりください。



北井一夫 いつか見た風景

当館では、日本を代表する写真家の一人である北井一夫の個展を開催します。当時を象徴するできごとを扱った初期の代表作「バリケード」、「三里塚」、失われていく農村の原風景を捉えた「いつか見た風景」、「村へ」、新興住宅街の生活を明るくイメージで捉えた「フナバシストーリー」など、北井の作品は様々な作風に変化しているように見えますが、常に時代と向き合う平凡な個としての視点で捉えていることに変わりはありません。彼の作品は、当時を体験した世代にも、ポストバブルの世代にも、新鮮な共感を与え続けています。美術館初の個展となる本展に寄せたエッセイを紹介します。

「時代の抽斗」^{ひきだし}

写真を撮始めた頃は、30を過ぎたら写真はやめて真面目な仕事をさがそうと考えていた。それを思うともうずいぶん長く貧しい写真家を続けてしまった。貧しいことはそれほど苦にならなかったが、何を撮ればいいのかテーマを見失った時がもっとも苦しかったと思う。それでもブローニーや4×5にカメラのサイズを変えようと思ったことは一度もなく、35ミリ判カメラだけでやってきた。カメラやレンズを沢山持つことも避けてきた。今はカメラ3台とレンズ5本だけである。

私は写真を撮り始めてからそろそろ50年になる。長く続けたからといって別に良い事など何もないのだが、今になって初めて気付くひそかな楽しみを発見した。それはつまり、半世紀も写真を撮り休まずに続けた写真家は「時代の抽斗」のようなものを手に入れるということである。

50年分5000本ほどのフィルムとベタ焼、古プリントなどがあって3、4年に一度は虫干しと整理を欠かせない。今では私の家の六畳間全部がそれのための収納庫になっていて、冬の乾燥した時期に20日位をかけて整理仕直すのだ。

撮影した時代とテーマごとに分類して抽斗に納めていくのだが、いつの頃からか、それを私が生きた「時代の抽斗」と思うようになった。どんな時代の過去を何時でも自由に引き出せる。そんなことが今の私にはささやかな楽しみなのである。

こんなばかな事を考えながら、思わずもまた、カメラを手をにさすらう日々を重ねていくのかと思う。

2012年8月27日

北井一夫

3階展示室 11.24(土) → 2013.1.27(日) 1月2日・3日は年始特別開館

友の会無料 | 三越カード割引 | アトレビューSuicaカード割引

一般600(480)円 / 学生500(400)円 / 中高生・65歳以上400(320)円

()は20名以上の団体、当館の映画鑑賞券ご提示者、上記カード会員割引料金
※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料
※東京写真美術館友の会会員は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

□主催: 東京都 東京都写真美術館 / 朝日新聞社 □協力: ギャラリー冬青

❖ 展覧会関連イベント

【作家とゲストによる対談】
北井一夫×金子隆一(東京都写真美術館専門調査員)
2012年12月15日(土) 14:00-15:30 1階アトリエ(定員70名)

北井一夫×田中長徳(写真家)
2013年1月12日(土) 14:00-15:30 1階アトリエ(定員70名)
※展覧会チケットの半券をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます。
※当日10:00より1階受付で整理券を配布します。整理番号順入場 自由席

❖ 担当学芸員によるフロアレクチャー 第2・4全曜日 16:00~
※本展覧会の半券(当日有効)をお持ちの上、会場入口にお集まりください。

- | | |
|---|-----|
| 1 | 3 |
| 2 | 4 5 |
| | 6 7 |
- 1) 三里塚<少年行動隊> 千葉県成田市 1970年
 - 2) いつか見た風景<五能線> 青森県津軽 1972年
 - 3) 「フナバシストーリー」より 千葉県船橋市 1987年
 - 4) おてんきくつばめの子> 岐阜県津川村 1991年
 - 5) 過激派<機動隊突入> 長崎県佐世保市 1968年
 - 6) 村へ<雪の中で> 秋田県湯沢市 1974年
 - 7) 1990年代北京<鳥市> 北京 1996年

B1F

地下1階展示室 Exhibition Gallery

10月27日(土) → 11月18日(日)

写真新世紀 東京展 2012

New Cosmos of Photography Tokyo Exhibition 2012

 入場無料 主催：キヤノン株式会社 共催：東京都写真美術館

キヤノンが文化支援活動の一環として行っている「写真新世紀」は、1991年に公募をスタートして以来、これまでに国内外で活躍する優秀な写真家を多数輩出、新人写真家の登竜門として広く知られています。

今年は第35回目の公募を実施、応募者1,325名の中から厳正な審査を経て、優秀賞5名と佳作20名が選ばれました。「写真新世紀 東京展 2012」では、それら受賞作品を展示するほか、昨年のグランプリ受賞者である赤鹿麻耶氏の新作個展も紹介します。

フレッシュで力強い受賞作品の数々をお楽しみください。



写真新世紀 東京展 2011 展示風景より

関連イベント

- ◎11月3日(土・祝) / アーティスト・トーク (会場内)
- ◎11月9日(金) / グランプリ選出公開審査会 (1Fホール 予約制)

- ◎お問い合わせ：キヤノン(株)写真新世紀事務局 03-5482-3904
- ◎ホームページ：http://canon.jp/scsa

B1F

地下1階展示室 Exhibition Gallery

10月6日(土) → 10月21日(日)

**第23回日本写真作家協会会員展
第10回日本写真作家協会公募展** 入場無料 主催：日本写真作家協会 共催：東京都写真美術館

今年で23回目となる日本写真作家協会会員展は、会員による217点の作品が出品されます。また、第10回目となる公募展には全国の応募作品から選ばれた入賞・入選作195点を展示いたします。

◎お問い合わせ：一般社団法人日本写真作家協会 03-3535-6251

B1F

地下1階展示室 Exhibition Gallery

11月24日(土) → 12月2日(日)

第13回上野彦馬賞

九州産業大学フォトコンテスト受賞作品展

 入場無料 主催：毎日新聞社 / 九州産業大学

21世紀に羽ばたく若い写真家の発掘と育成を目的とし、わが国の“写真の祖”として尊敬されている「上野彦馬」の名を冠した「上野彦馬賞-九州産業大学フォトコンテスト」。9月14日まで募集された作品から、入賞した作品をご紹介します。展覧会です。

◎お問い合わせ：毎日新聞福岡本部事業部 092-781-3636

写美から世界へ。

**海外巡回展
レポート**

東京都写真美術館は豊富なコレクションと独自の企画力により、海外の美術館から巡回や企画の依頼が増えています。ここでは本年度、海外で開催されている展覧会の一部をご紹介します。

島山直哉展 ナチュラル・ストーリーズ
Naoya Hatakeyama Natural Stories

会場：サンフランシスコ現代美術館(SFMOMA、アメリカ)
詳細：SFMOMA <http://www.sfmoma.org/>
開催期間：2012年7月28日(土)～11月4日(日)



写真を紹介する美術館として、アメリカで中心的存在のSFMOMA。広い展示室には、「underground」シリーズの出品数が増えたことで、オリジナル展とはまた違った空間が出来上がりました。現地のスタッフが当館の企画意図を深く理解し、サンフランシスコならではの自然に対する感覚で作らせた本展は、自然をテーマにした普遍的な表現として、現地でも高い評価を受けています。



展示風景 (SFMOMA)

東京都写真美術館コレクション展
Japanese Photography in 1960's-1970's
from the collection of
Tokyo Metropolitan Museum of Photography

会場：東江写真博物館(韓国)
詳細：第11回東江写真祭 <http://www.dgphotofestival.com/>
開催期間：2012年7月20日(金)～10月1日(月)



第11回東江写真祭は韓国・寧越郡の援助のもと、写真家たちが組織した委員会が運営しています。今回は60～70年代の日本人写真家を紹介した東京都写真美術館コレクション展がメイン会場の東江写真博物館で開催されました。オープニングでは当館学芸員が講演会を行い、写真ファンだけではなく多くの地元の方で賑わいました。



外観・展示風景など(東江写真博物館)

このほかに、本誌1ページでご紹介した「日本の新進作家 vol. 11 この世界とわたしのどこか」が、日本に先だって香港で開催されます。

日本の新進作家 vol.11 この世界とわたしのどこか
somewhere between me and this world - Japanese contemporary photography

会期：2012年10月13日(土)～11月4日(日) 会場：香港アートセンター <http://www.hkac.org.hk>

映像をめぐる冒険 Quest for Vision vol.5

記録は可能か。

□ 一般 500(400)円 □ 学生 400(320)円 □ 中高生・65歳以上 250(200)円

()は20名以上の団体、当館の映画鑑賞券ご提示者、上記カード会員割引料金

※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※東京都写真美術館友の会会員は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

□ 主催：東京都 東京都写真美術館／産経新聞社 □ 協賛：凸版印刷株式会社 □ 協力：NECディスプレイソリューションズ株式会社／早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点平成24年度公募研究「映画以後」の幻灯史に関する基礎的研究／神戸映画資料館／映画美学校 □ 後援：サンケイスポーツ／タ刊フジ／フジサンケイビジネスアイ／iza!／SANKEI EXPRESS

当館は平成20年度より「映像をめぐる冒険」シリーズと題して、映像部門の5つの基本コンセプトの中から毎年1つを取り上げた展示会を開催してきました。5回目となる今年(記録としての映像)をテーマに、写真、インスタレーション、映像装置など約60点を展示。映像というメディアの歴史を遡りながら、その今日的な役割を考察します。

映像史において記録映画ともいわれるドキュメンタリーは、映画の誕生とともに始まりました。映画の父・リュミエール兄弟の世界初の実写映画「工場の出口」(1895年公開)は、工場の出口から出てくる労働者たちの様子を撮影した記録映画でした。それから100年以上を経た今日、ドキュメンタリーは一つのジャンルとして定着し、映画に限らず、テレビ、インターネットの動画配信やソーシャルメディアを通じて観ること、発信することができます。しかし、映像の誕生から一世紀余り、私たちを取り囲む日常は日々刻々と変化し、映像が担う役割も複雑化してきています。映像は何を記録し、何を伝えることができるのか。そもそも映像とは、何かを記録することができるものなのか。本展ではそうした問いを出発点に、記録映像の変遷と可能性を、映像と社会を結びいくつかの事例から検証します。

❖ 展示会関連イベント

【特別トークイベントシリーズ】

出品作家、ゲストによる連続トーク企画、作品の解説を行います。

◎2012年12月22日(土) 15:00～16:30

ゼロ次元・加藤好弘(美術家)、黒ダイヤ(戦後日本前衛美術史研究者)

◎2013年1月19日(土) 15:00～16:30

宮井陸郎、平沢剛(映画研究者)

会場：東京都写真美術館 1階アトリエ 定員：各回70名

受付：当日10時より当館1階受付にて整理番号付き入場券を配布します。

※整理番号順、自由席。開場は開演の30分前より

※入場無料・どなたでもご参加いただけます。

❖ 担当学芸員によるフロアレクチャー

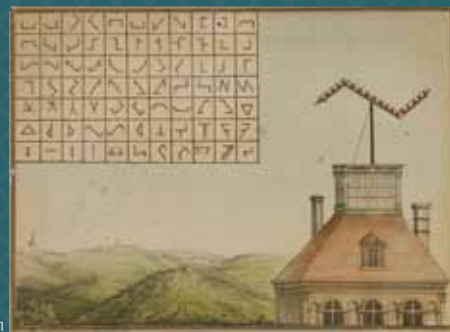
第2・4金曜日 14:00～ および2013年1月2日・3日 14:00～

※本展示会の半券(当日有効)をお持ちの上、会場入口にお集まりください。

その他のイベントにつきましては決定次第詳細を発表します。

通信 — メッセージ

映像史を「通信」の観点から考察し、技術環境と映像のメッセージが関わる接点に着目。具体例として当館のコレクションである様々な幻灯機や関連資料を展示し、社会運動と結びついた、日本における幻灯機の受容と流通を探っていきます。



1) 作者不詳「腕木通信機」1840年 2) 幻灯機(Magic Lantern) 3) 幻灯機スライド式種板 4) 幻灯機・種板

抗議と対話 — アヴァンギャルドとドキュメンタリー

日本の写真・映像文化において特異な役割を果たした金坂健二。金坂とともにアヴァンギャルドを牽引した宮井陸郎。同時代の記録映画監督・小川紳介。その多様な作品群を通じて、美術と政治が交差する1960年代の日本を検証していきます。



5

5) 金坂健二収蔵コレクションより

6) 金坂健二収蔵コレクションより

記憶 — アーカイヴ

映像や写真はすべての現実を記録することはできずとも、現実を想起させることは可能かもしれません。ここでは、様々なメディアで場所や空間の歴史を探求するニナ・フィッシャー&マロアン・エル・ザニの作品を通じて、映像と記憶の関係を考察します。



ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・ザニ「成田フィールドトリップ」(2010年)



参加作家プロフィール(予定)

※事業の内容はやむを得ない事情により変更する場合があります

金坂健二

1934年東京生まれ、1999年死去。写真家/映像作家/評論家。慶応大学文学部英文学卒業後、映画評論家として活動する一方で前衛映画の制作を行い、60年代から70年代にかけて渡米し、アンディ・ウォーホルやアレン・ギンズバーグなど当時のカルチャー・シーンの中心人物とも親交を持ちながら、アンダーグラウンド映画を日本に初めて紹介。ストリートの深部に入り込み自らも写真家として多くの作品を発表した。主な映像作品に「アメリカ・アメリカ」(1960)、「ホップスコッチ」(1961)、「燃えやすい耳」(1962)がある。

小川紳介

1936年東京生まれ、1992年死去。映画監督。35年岩波映画製作所に入社。38年フリーとなり、41年小川プロダクションを設立、学園紛争や三里塚闘争などの記録映画を撮る。50年山形県上山(かみのやま)市にうつり、農村を対象としたドキュメンタリー映画をとり続けた。代表作に「三里塚・第二砦(とりで)の人々」(1968)、「ニッポン国古屋敷村」(1970)など。

宮井陸郎

1940年生まれ。映像作家。1960年代に、「映像芸術の会」に参加するとともに、「ユニットプロ」を主宰、拡張映画、環境映画としての映像作品を数々発表し、アンダーグラウンドシーンを牽引する。またアンディ・ウォーホル展の企画などプロデューサーとしても活躍。1970年代半ば以降はインドにわたり、宗教研究に携わる。

ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・ザニ

ニナ・フィッシャー(1965年ドイツ、エムデン生まれ)とマロアン・エル・ザニ(1966年ドイツ、ドゥイスブルク生まれ)、ベルリン在住。90年代前半より、廃墟や忘れ去られた場所や空間を題材に、その社会・歴史的な意味を探求していくプロジェクトを映画、写真、インスタレーションなど様々なメディアを通して展開している。日本では「オーラ・リサーチ」展(東京都写真美術館、1998年)を始め、グループ展、映画撮影や上映など多数。

予告

第5回恵比寿映像祭

開催期間：2013年2月8日(金)～2月24日(日) ※2月12日、18日休館
入場無料(定員制のプログラムは一部有料)

恵比寿映像祭は、映像表現の可能性を、芸術の視点からあらためて捉えてみよう!と試みるユニークな映像の国際フェスティバルです。年に一度、東京都写真美術館全館と恵比寿地域を拠点に、展示、上映、ライブ・イベント、講演、トーク・セッションなどを複合的に行うことを通じて、映像分野における創造活動の活性化と、優れた映像表現やメディアの発展を過去から現在そして未来

へといかに継承していくかという課題について考える場となることを目指しています。世界中から恵比寿に集まってくる選りすぐりの映像作品の数々を、どうぞお楽しみください。総合テーマおよび出品作家は10月下旬頃に、チラシおよび公式ホームページにて発表します。

恵比寿映像祭公式ホームページ www.yebizo.com

Film 『スケッチ・オブ・ミヤーク』

沖縄 宮古島で歌い継ぐ人々の深淵なるドキュメンタリー。

原初の姿が残る沖縄県宮古島。この奇跡の島で、「アーク(古謡)」と「神歌(かみうた)」を唄い継ぐ人々の暮らしを追うなかで、神と自然への畏れ、そして生きることへの希望を見出した深淵なるドキュメンタリー。生と信仰と唄がひとつになった、これほどまでに豊かな世界があったことへの衝撃と不思議な懐かしさが、私たちの胸を打つ。



© Koichi Onishi 2011

大衆 03-5367-6073

上映スケジュール: 2012年9月15日(土)~ 休映日: 9月18日(火)、24日(月)、10月2日(火)、9日(火) 上映時間: 11:00/13:30/16:00/18:30 ※3週目以降の上映スケジュールについては、お問い合わせください。

料金: [当日券] 一般1,800円 学生1,500円 シニア・中学生以下1,000円 【映画公式ホームページ】 http://sketchesofmiyahk.com/

Film 『天のしずく 辰巳芳子“いのちのスープ”』

農と食を通して、人間としてのあり方や尊厳を探ります。

3.11以降の日本で、私たちはどうやって生きていくのか。日本人にとって今、いちばん大切なこととは何なのか。私たちが目指すべき生き方を、「食」を入口に探求する料理研究家・辰巳芳子。人間の根源にふれるその暮らしや取り組みを追いながら、農と食を通じて、人の命の尊厳をあらためて考え直す珠玉のドキュメンタリー。



© 天のしずく製作委員会

環境テレビラスト 03-3352-0680

上映スケジュール: 2012年11月3日(土・祝)~ 上映時間帯等の詳細はお問い合わせください

料金: 一般1,800円 他料金未定 【映画公式ホームページ】 http://tennohshizuku.com/

1F ミュージアムショップ『ナディッフ バイテン』 r CAFÉ BIS (カフェ・ビス)』

【営業時間】 ◎ナディッフ バイテン/10:00-18:00(木・金は20:00、土は18:30) 【お問い合わせ】Tel.03-3280-3279 ◎CAFÉ BIS/11:00-18:00(ラストオーダー17:30) 【お問い合わせ】Tel.03-6721-7474

ミラノ生まれのpajamaのソフトケース。こだわりの生地で、カメラやデジタル機器をシンプルに、しっかりと守ります。



スマートフォン用 2,310円 iPad用 3,990円 macbook air用 4,200円(すべて税込)

甘さ控えめ、ホームメイドのケーキです。ポピーシードの食感をお楽しみください。



ポピーシードとクリームチーズのケーキ 380円(税込)

友の会 Support 展示会のご招待・割引、1階ホールの上映映画や関連施設の割引など特典を多数ご用意して、皆様のご入会をお待ちしております。

年会費 個人会員 2,000円 家族会員(同伴者1名まで) 3,000円 シルバー会員(65歳以上の方) 1,000円

※受付は当館1階チケットカウンター横の「友の会カウンター」のみとなっております。 ※会員証の有効期限は、入会から1年間(翌年同月末日まで) ※詳細は当美術館までお問い合わせください。 Tel.03-3280-0099(開館時間中)

Table with columns for '友の会特典' (Friends Club Benefits) and '特典内容' (Benefit Details). It lists various benefits like discounts, exhibitions, and special services for members.

支援会員 Corporate Members

東京都写真美術館の活動をご支援いただくため、次の企業・団体に支援会員としてご入会いただきました。

- List of corporate members and sponsors, including companies like Kyocera, Canon, and various insurance and media companies.

(株)=株式会社、(相)=相互会社、(有)=有限会社、(学)=学校法人

(平成24年8月現在・五十音順)